

## 石手川ダム

石手川ダムは、重信川水系石手川の重信川合流点より上流 14.1km に建設された洪水調節、かんがい、上水道用水の補給を目的とした多目的ダムです。

石手川の洪水調節については、既往最大である昭和 18 年の洪水を中心に検討すると、石手川湯渡地点の基本高水流量  $700 \text{ m}^3/\text{s}$  に対して、河道の流下能力は  $450 \text{ m}^3/\text{s}$  程度であり、しかも重信川合流点から 8km の区間は松山市中心部を貫流しているため、基本高水流量を河道で処理するよりも、ダムによる洪水調節を採用する方が得策と考えられました。このため、基本高水流量  $700 \text{ m}^3/\text{s}$  のうち  $250 \text{ m}^3/\text{s}$  をダムで調節し、残り  $450 \text{ m}^3/\text{s}$  を河道に配分することにしました。また、石手川北部山麓の柑橘園地にはかんがい施設がなく、天水に頼っている状況で、昭和 42 年の干ばつによる被害が甚大なものとなり、水源確保が重要な課題となっていました。さらに、重信川には水源として新たな開発の余地は少なく、松山市の人口増加及び水道普及率の上昇並びに生活水準の向上に伴い、水道用水の需要の増加が著しく、この水源確保も急務となっていました。

このような状況から石手川ダムが計画され、昭和 41 年度に建設省が実施計画調査に着手し、昭和 43 年度から建設が始まりました。補償交渉は順調に進み、補償基準の妥結後、昭和 43 年 12 月に本体工事に着手しました。転流工、仮設備工、工事用道路が着手され、転流工の完成を待って、昭和 44 年 1 月から基礎掘削工事が、昭和 45 年 3 月から本体コンクリート打設が開始されました。その後、左岸側の地質不良、断層破碎帯などに悩まされながらも工事は進み、昭和 47 年 5 月に試験湛水、8 月に本湛水が始まり、昭和 48 年 3 月に石手川ダムは完成しました。石手川ダムの展望所には竣工式の写真パネルが掲示されており、そこには「石手川ダム建設工事は、徹底した安全管理により、224 万時間無事故無災害（延べ労働時間）という我が国のダム工事史上初めての記録を樹立した」と記されています。

石手川ダムは奥道後や松山市街地から近いという位置にあるため、完成直後から多くの観光客や市民が訪れていました。このため、利用者が安全に安心して楽しめるダム周辺の環境を創造するため、昭和 50 年度～52 年度に石手川ダム周辺環境整備事業が行われました。事業の実施にあたっては、松山市、愛媛大学、建設省、愛媛県、地元区長、青年団、婦人会、PTA などによる協議会を設立して検討した上で、緑化、施設整備、植栽などが行われました。事業完了後の管理については、協定を締結して、維持及び運営は松山市が、修繕は建設省（国土交通省）が実施しています。石手川ダムのダム湖は、道後温泉のシンボル「白鷺」の伝説にちなみ、「白鷺湖」と命名され、やすらぎと憩いの場として人々に親しまれています。

<参考文献：建設省四国地方建設局松山工事事務所編「石手川ダム完成 20 周年記念誌」1993 年、同「松山工事四十年史」1985 年など>

